

第1回 文化交流施設整備検討会【要旨】

日 時	令和3年8月4日（水）午後6時30分～午後8時
場 所	荒川区民会館4階 第2集会室
出席者	<p>（委員）卯月盛夫委員長、齋藤啓子副委員長、沢木拓也委員 羽生冬佳委員、両角達平委員、町田高委員 鎌田理光委員、松田智子委員、小林行男委員 清水啓史委員、志村博委員、富永新三郎委員 北川嘉昭委員、古瀬清美委員</p> <p>（事務局）伊藤地域文化スポーツ部参事、文化交流推進課担当 松崎再開発担当部長、能見再開発担当課長 住まい街づくり課担当</p>

1 委員出席確認

2 配付資料確認

3 副区長挨拶

4 委員紹介

5 議題「文化交流施設について」

（1）これまでの議論や経緯等の説明

（2）意見交換

○（委員）一番大切なのは、人が本当に来たくなるかどうかであり、商業施設の更
に上の階には、目的がない限り行かない場所なので、わざわざここに行きたいと
思わせる何かが必要で、人を引きつける強いものがないと難しい。訪れたこと
により、その人にとって何かしらのプラスになることをどのような形で付加でき
るのかを詰めていけるとよいと思う。

例えば、アウトドアの要素を通して幅広い年代層が楽しめる施設にすることが
考えられる。テントでの防災体験やクラフトが出来るなど良い。自然は子どもの
情操教育に非常によく、脳科学にも詳しい養老孟司氏も非常に虫が好きで、虫を
覚えることで頭の中を整理できる人間になっていくというの聞いたことがある。

○（委員長）この屋内施設と屋外空間の連携ができたらいと思う。

○（委員）3つの機能をシームレスにつなぎ、グラデーションを持たせていくとい
うことだが、大きな再開発の中で3つの機能にした理由は何か。

○（事務局）3つの機能に至った理由は、この地域に不足しているもの、区民に求
められているものを想定し、地域バランスも含め考えてきたものである。現在の

内容を参考にいろいろなご意見を頂いて、全く違うものになるのも問題ないと考えている。

- （委員）観光という観点からお話しすると、観光とは基本的に外から人が来るもので、通常は近くに集客ができるものがあり、それを増幅させたり、魅力を増すために何かを足したり、あるいは全く違ったものを合わせて魅力を複合化するなどで集客力を高めるなどの手法はあるが、駅前を見た感じでは今一つ手法が分からない。

この施設は7階であり、グラウンドレベルで人が歩いた流れでそのまま入っていく場所ではなく、わざわざ来てもらうことはハードルが高いうえ、4,000㎡と大きい施設だが、3つの機能ありきだと観光として使えるスペースはわずかと考えるため、何を観光分野として持ってくるべきか悩んでいる。

- （事務局）区民の施設であるのはもちろんだが、閉鎖的・排他的な施設である必要はないと思っている。区民以外も一緒に楽しめる、そのような形が望ましいのではないかと考えている。例えば、高い利用料の施設ではいけないと思うが、昔ながらの公民館的施設では、これからの時代にそぐわない部分もあると考えている。

荒川区でここにしかないものを作りたいと思っており、そういうものが何なのかを、検討会でご意見をいただき、新たなものを切り開いていきたいと思っている。

3つの機能で構成されると観光はわずかとあったが、観光は全てに通じるものだと思っており、観光の捉え方は様々あるが、いろいろな人に来てもらい、楽しんでもらえるものが観光と考えるならば、示した3つの機能にも、それぞれ観光的な要素を入れていくことは十分可能だと思う。

7階については、当初の大ホール建設を見直した経緯、吸引力を持った公共施設や目的をもって訪れる8・9階のコンベンションからのシャワー効果を期待し、商業施設を低層階へ持ってきたので、施設設計の与条件となっている。

- （委員）このような公共空間を作ることは、私たちがどんな社会を、どんな街を作っていきたいかという問いと同じだと考えるが、日本は中途半端な商業施設ばかりだと思う。自分たちの声が反映され、それが形になる積み重ねが社会参画であり、公共空間を作るということだと思う。それがないため、中途半端な施設ばかりになり、パブリックな空間が日本にはない。

- （委員長）日本でも子どもたちがそこに行くと、伸び伸びと過ごせる空間が少しずつ増えている。そうした施設で共通しているのは、子どもたちがその建物の利用の仕方とかルールとかを、全部自分たちで作っていることだと思う。

- （委員）再開発施設が完成するのに7、8年ぐらいあるため、声をたくさん聞きデザインすれば、絶対いいものができると思う。
- （委員）これまで子どもたちが公共施設づくりの計画に参加する事例に関わってきた中で、「どんな場所が私たちにあったらいいか」がずっとテーマだったが、話し合いの中で顕著に表れていたことは、無料である、交通費がかからない、いつまでいても他人から言われたい、駅の近くや学校の近くにあるということであった。

西日暮里の施設は、駅近の公共施設なので、ニーズには大体当てはまると思う。あとは何が足りてないかといえば、施設に行きたくなるポテンシャルが必要で、当事者が考えないと思いつかない。

1階から6階の民間施設に何が入るのが、非常に重要で、子どもたちは民間施設にも働きかけ、自分たちが企画立案したことを、民間施設の中でも展開する行動力があるので、例えば体力があり、経済的にも支援してくれるような民間施設が来てくれたら良い。

多様な人たちが一緒に運営することは、子どもたちが何かをやりたい気持ちを発揮できたり、それに関わる大人も他の人と繋がれたり、子どもからパワーをもらえたりと、とても魅力的であり、そのような話し合いのプロセスが作れるとよい。

- （委員長）子どもや若者たちの意見を聞くことを行う可能性があるのか。
- （事務局）大きなコンセプトを決めてから検討会とは別に、ワークショップで意見を聴くことや、事前にアンケートを実施することも考えられる。
- （委員）今後、この検討会で3つの機能について深く検討されると思うが、例えば、子どもたちにこの場所で学校単位ではなく、同好会的に集まってもらい、ちょっと高度な教育ができるような環境を作っていったらどうか。
- （委員）荒川区にはもっと戦略的に、観光・文化をしっかりと発信していける区になってほしいと常々思っている。施設完成までに7、8年あるので観光のテクニカルな部分とかをぜひ教えてもらえたらと思っている。
- （委員長）23区の観光は、地方都市の観光とは違う部分があり、歴史的なものも大変豊かである。ただ、荒川区だけの資源かというところではなく、荒川区しかないものを見つける必要はないのではないかと。東京の東の地域として観光資源を見つければ、私は良いのではないかとと思うが、いかがか。
- （委員）一言ではお伝えしづらいが、特に東京のこの辺りは、都外の方からは区境は意識されず、全部まとめて浅草・上野と連なって千住まで続く一体的なエリアに川が流れていると捉えると思う。

荒川区の観光としては、少なくともすぐ近くに川があり、海外からも注目集め

るようなエリアが近接してあるため、それらと連帯し、区のいろいろなゾーンで、魅力を感じてくれるような場所となれば、総合的に観光が底上げされるという考え方でよいと考える。結局どのようなまちならば人は魅力を感じるのかということに、尽きると思う。

観光戦略で大事なものは、イメージづくりや、認知をしてもらうことであり、昔は観光地のイメージは大事だったが、現在はSNSというツールが、爆発的にイメージを世界に伝えてくれる。そうした中で荒川というネーミングにこだわるのか、地域で連帯して、東京の東側のイメージを伝播するような核となるイメージはどういったものかなど戦略を立てる必要があると思う。地方の観光地の観光戦略と、東京で隣合わせにいろいろな地区がモザイクになっているところでの観光戦略は別のものと考えた方がよい。

○（委員長）施設づくりに子どもが参加することで、荒川区の歴史や伝統という地域資源とうまく結び合うと面白いものが生まれるのかもしれない。その地域らしさのようなものが、子どもらしさにプラスアルファされて、その地域の魅力ができていないのではないか。地域の人に受け継がれていく地域らしさを取り入れることができれば、文化交流施設の可能性になってくると思う。

○（委員）資料に「芸術文化活動」というキーワードが何回も出てくる。芸術文化活動というのは、多様な人をつなぐいい手段になると思うが、どういうことを想定しているのか。東京の東側にあって西側にはない特徴は、西側は、働く場所と住んでいる場所が離れており、西側の子どもたちは、働いている人をあまり見ないで過ごしている。東側は働く場所と住んでいる場所の距離が、比較的近い気がするため、そういうところに芸術文化活動や地域活動の特徴があるのかと思う。

○（事務局）「芸術文化」について、区では「芸術文化振興プラン」を平成31年3月に策定をした際に、区民が主役になり、いろいろな活動に参加をすることを目指した計画としている。与えられてやるのではなく、自分から学んだり、見たり、参加することで生活や自分の幸福感を上げていくことを目指している。芸術文化の範囲をどこまでか一概には言えないところだが、日常生活での活動も文化の1つに入っていると考えている。

区では、「読書を愛するまち・あらかわ」として、読書を推奨している。本を読む、本を見る、本を書くなど、本に携わることも生涯学習であるし、それも文化の活動の1つでもあり、「芸術文化」というものを、大きく捉えている。

○（委員長）生活文化や生活に根付く芸術やものづくりの歴史なども、西に比べれば東のほうがある。そういう手作りの文化みたいなものが入ると観光と子どもを結び付けられるかもしれない。

アウトドアやインドアは、地域の関連がなくても、どこでもできるイメージだが、地域をどう意識させるかという話についてはどのように思うか。

- （委員）現在、アウトドアではキャンプ場が非常に人気だが、特に地の利をうまく生かしたキャンプ場が人気であり、土地ならではの良さをアピールし、どういう人に来てほしいかを明確にするなど、情報の出し方をしっかりと選んでいる。

区内にもいろいろな学校があると思うので、特に中高生の意見を聞くことにより、いろいろな意見が出て新しいものを作っていける気がする。

- （委員長）高校などから話を聞くことも想定しているか。
- （事務局）やりたいと思っている。区立ではないが区内に私立2校・都立3校があり、特に開成高校はこの施設のすぐ近くにあるため、ぜひ聞きたいと思っている。
- （委員）開成高校には、区の俳句事業に参加してもらうなどのつながりもある。また、俳句つながりで、他の高校にも声をかけているので、今回の施設にもその繋がりを生かしていければ面白いと考える。
- （委員）西日暮里駅の利用者は、駅界限に住んでいる方より、区外の方のほうが乗換駅として通っていると思う。ここを魅力的なまちにするためには、7階の区有施設を商業施設やコンベンション施設との兼ね合いも考えて作っていかないと、せつかくいいものを作ってもしょうがないと思う。そのため、若者の声をまず聞き、少しでも取り入れて、自分の発言が現実になる喜びとかを感じてもらいたい機会ではないか。

- （委員）西日暮里駅だが、駅の反対側とは鉄道で区切られてしまっているため、この施設にアプローチする際に、今ある舗道では狭く、街全体の印象が好ましくない。例えば、ペDESTリアンデッキなどで、歩きやすい景観を作ることも考える必要がある。今、まちづくりの第一要素として歩きやすい空間をと盛ん言われており、この区画だけではなく、道そのものがより使いやすいものになるために、周辺の人たちと協力して進めていただきたいと思う。

- （委員長）これだけの規模の再開発なので、人の流れが多くあると思うが、どのようなアクセシビリティが再開発ビルまであるのかを、次回の検討会などでお聞かせ願いたい。

- （委員）若者の声を聞く方法として、「何が欲しい」と聞くのではなく、議論自体を若者が主導している状態を作らないといけないため、まず、若者に相談するところから入るのがよい。

観光の話もでたが、観光の流れも今、大きく変わってきていると思う。ヨーロッパでは、グローバリゼーションも負の側面があるので、ローカリゼーション、

地域を大事にしようという動きが大きく起きている。観光の評価指標は、旅行者数や観光客の満足度でいいのか、それよりは住民の幸福度ではないのかと、問われており、エコツアーリズムという点も必要になるのではないかと。

先ほど、高度な教育の場という話があったが、学力が世界一のフィンランドでは子どもは遊ばせ、宿題もないが、実はそれが高度な教育なのだろうと言われていた。発想の転換をしながら、次の世代につなげていけるような施設になると良いと思う。

- （委員長）第1回目の検討会のまとめだが、まずはこの施設が、みんなが行きたくなるようなサード・プレイスとなるような施設として考えていけたらということところが1つである。

東京の東側は職住近接で、歴史や伝統がある。区境にこだわらず東の地域の魅力は何か改めて見直し、この地域に住んでいる子どもたちにとって誇りになるような施設とし、駅直近を生かして生活文化や生活芸術みたいなものの拠点にすべきではないかというのも、1つである。

また、子どもの声を聞くには、子どもの主体性をかなり確保した上でワークショップを実施する等の工夫が必要で、どの時期に実施するかをぜひ考えていきたい。

そして、この施設は再開発の一環であるため、文化交流施設と同じ建物の1階から6階は何が入るのか、7階へのアクセシビリティを高めるため、周辺の動線はどのようになるのかも確認したい。

最後となるが、屋上の利用や屋外スペースと屋内空間をうまく結びつけることができたとしても魅力的になるかもしれないため、再開発ビルということを利用にとらえるのではなく、駅に直近の再開発ビルということプラスに生かすような方向も考えたい。

6 次回日程

9月14日（火）

7 事務局からの事務連絡